



習字で使う墨は、何からできているの

マツや植物油のすすなどから作る

墨は、マツや植物油などを燃やしてできたすすと、にかわをおもな材料にして、これにかおりがつくものや、薬剤などを加えて作ります。材料によって、松煙墨、油煙墨、工業煙墨などに分けられます。

松煙墨は、老いたマツの枝や根を燃やして、そのけむりからとったすすを使います。また、油煙墨は、きり油、ごま油、なたね油などの、植物油を燃やしたすすを使います。

最近の墨は、ふつう、カーボンブラックという、鉱物性の炭の粉によって、大量生産できるものが多くなりました。中級以下の墨は、鉱物性の炭の粉から作られています。また墨汁や練り墨なども、作られるようになりました。

中国では、殷の時代に使われていた

墨の形には、円形、長方形、だ円形、小判型、円柱、角柱など、いろいろな形のものがあります。

中国では、紀元前1500年ごろにできた、殷王朝の時代の甲骨や陶片、木簡などに墨が使われていましたが、古代の墨がどのようなものであったか、よくわかっていません。

現在のように、にかわで固めたものは、漢の時代になってからです。日本では日本書紀に、高麗の僧が、墨の製法を伝えたことが記されています。

しかし、古墳時代の壁画に、黒、朱、緑、黄などの色が使われているので、墨はかなり早い時期に、朝鮮から輸入されていたようです。（監修・青木 国夫）

